Cardinal Report

茶葉寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃａｒｄｉｎａｌ　Ｒｅｐｏｒｔ

【Ｎコード】
Ｎ２５７１Ｗ

【作者名】
茶葉寺

【あらすじ】
誰もが魔術を学べる現代社会。
魔術師はたった一人で劣勢な戦況を覆す可能性を持っているとされ、世界各国が魔術師の育成に力を入れていた。
緋瑪夜司（ひめやつかさ）は光杯市（ひかりさかずき）に居を構える探偵であり魔術師である。彼のもとに舞い込んでくる依頼は猫探しから殺人事件の解決までと幅広い。
しかし行きつく先に魔術が絡んでいることは少なくない。
金髪美女の相棒・黒月レイン（くろつきれいん）とともに街で起きる魔術犯罪を解決するために、司は今日も奔走する。

プロローグ

人と人との繋がりはたとえ長い間離れていても決して途切れることはない。それが家族であるならなおさらだ。

この事件はある少年の家族を思う気持ちが引き起こした悲しい復讐劇だ。

俺たちはその一番近くにいながら未然に防ぐことも事件を止めることも、ましてやとめどなく流れ落ちる涙を枯らすことは出来なかった。無力を味わい。自責と後悔に負われた。だが進んだ針は戻らない。そうであるならば俺に出来ることは、人々の記憶からこの事件が忘れられてもいつでも思い出せるように、俺自身の戒めとなるように、記録に残しておくことだけ。

ことの始まりは三か月前に遡る。俺とレインは警察からの依頼を受けてある事件を追っていた。通称『連続凍傷事件』と呼ばれたこの事件は死者こそ出なかったものの少なくない数の人がその被害に遭った。犯人は発生当初からわかっていたが、警察は逮捕することができずにいた。なぜなら犯人は人ならざる力を使えたからだ。

魔術。鬼術。呪術。好きに呼ぶといい。これらの力は限られた一部の人間にしか使うことができないとされていたが、現在では九割の努力で学べば「魔術使い」と呼ばれる時代となっていた。そのための公的な教育機関も設立されている。なぜなら、魔術師という存在は国にとって戦力として欠かせないものとなっているからである。

彼らの力は絶大だ。戦闘訓練を積んだ魔術師であれば一般歩兵十人分に相当する力を発揮し、場合によっては一人で戦況を覆すほどの力を持つ者もいる。世界各国が魔術師を育成しようと躍起になるのは当然のことである。

だが忘れてはいけないのが、誰しもが「魔術師」と呼ばれるわけではない。日本における魔術の総本山『魔術協会』に認められて初めて「魔術師」と名乗る資格を得ることができる。その登録数はお

よそ五百人。魔術を学んだとされる者がおよそ一万人と言われているのでいかに狭き門かは言わずもがな。
そうした現状を快く思っていない者達も大勢いる。その中でも『イルザフォン』と言う組織があった。彼らは誰もが等しく「魔術師」と名乗れる環境を創るための活動・研究をしており、長年問題となっている『血の記憶（ハイマメモリア）』と呼ばれる薬を開発した狂信者集団であった。
その薬を投薬された者は己が魂に刻まれた原初の記憶の力を操ることができ、「魔術師」と同等かそれ以上の力を発揮できるようになる。そのような者たちのことを俺たち関係者は『覚醒者（ラミア）』と呼んでいる。だが強大すぎる力は自身で制御することは出来ない。ただ暴れ狂い、災厄を撒き散らす狂戦士となり果てる。
そんな犯人を素人集団（中には魔術を学んだ者がいるが手に負えなかった）である警察が相手をするには荷が重い。だから俺たちのような専門家が出張るに至った。

俺たちが到着した時にはすでに現場はこう着状態に入っていた。
車越しに銃を構える複数の警官。その額には大粒の汗が浮かんでいて、表情にも余裕がない。それもそのはず。自身らが手にしている必武器が相手に通用しないからだ。
複数の銃声が封鎖区画で響いた。緊張状態に耐えられなかった警官達が引き金を引いたようだ。放たれた弾丸は必殺の威力を持って犯人に襲いかかるがしかし、命中することはなく周囲を覆う白い霧に阻まれ、氷漬けにされてポトリと落ちる。何度目かの絶望が彼らの戦意を凍りつかせた。
「なるほど。彼女の属性は氷。能力は熱の搾取。効力は空気中の温度を奪い、自身の周りに冷気の霧を生成。それを拡張させることで攻撃、また自身への物理攻撃を凍結させることで遮断するようですね」
冷静に分析する金髪の美女に思わず苦笑を浮かべてしまう。一目

で敵の手の内を看破するレインの観察眼にはいつも頭が上がらない。
「物理干渉を寄せ付けず、安易に近づけば氷漬けか。話に聞いていた以上に厄介な能力だな」
「にもかかわらず彼女はまだ第一段階です。能力が不安定な今のうちに手を打たなければ今後死者が出るのは確実です」
　退路は断たれ四方は囲まれている。突きつけられた銃口は無力ではあるが精神的に追いつめる凶器に変わりはない。しかしながら犯人である少女は肩で息をしながらも目は死んでいない。自分が置かれている現状に疑問と怒りと不安が入り混じっているように見えた。この場合追い詰めているのは警察かそれとも。
「この状態が続けばあの子が第二段階を昇る確率と意識を失うのは五分五分か。どちらに転がってもあの子の未来はここで潰えるか」
「ですが陣内さんの依頼は彼女の命を救うことです。であるならば――」
　レインは悲痛な面持ちで訴えてくる。最後まで言わせるつもりはない。
「わかってるよレイン。俺も救える命を目の前で消えていくのは見たくない。だから、力を貸してくれ」
　線の先に見据えるのは白い霧の中に立ち、辛そうにしている少女。コントロール出来ない力を一日二十四時間計七日放出し続けてきたことと敵意と畏怖の人生で経験したことのない感情の矢で射抜かれたことで身体も心も限界に近い。
「貸してくれ、などと言わないでください。私はあなたの銃であり剣でもあり、なにより唯一無二の相棒なのですから」
　レインは少しすねたように、しかし最後はつい見蕩れてしまう微笑を浮かべて決まり文句を言った。
「そうだな・・・では行くぞ、レイン。いつものように俺が前衛に出て対処に当たる。お前は後方支援を」
「了解しました。お任せを」
　俺は肩にかけているホルスターから愛銃を抜き出した。白銀に輝

くその銘は【アヴェ・マリア】。冠するは『鳴り響く福音の天鐘』。俺が魔術師であり魔法使いと呼ばれ、数々の修羅場を共に駆け抜けてきた親友は、目の前の少女を必ず救ってくれる。

だから俺は揺らぐことのない絶対の確信を持って、引き金を引いた。

物語はそれから三ヶ月後。二人だった事務所に居候が一人加わって賑やかになり、それも落ち着きだした頃。レインの機嫌の変動も落ち着きを見せたある春のこと。ある事件の解決を依頼されたところから始まる。

今にして思う。俺こと緋瑪夜司（ひめやつかさ）が少女、朽葉雪（くちばゆき）と出会ったのは必然であり、この事件――後に連続炎殺事件と呼ばれる――に関わったのもまた必然だったのだと。

そして事件の最後に待つ結末は、俺の心から消えることはないだろう。

Written By Thukasa Himeya

プロローグ（後書き）

皆様はじめまして。茶葉寺と言います。小説書くの初めてなのにいきなり連載とは無謀にもほどがあると思いますが、楽しめるように努力していきますで、よろしくお願いします。

?－1：昼下がりの一波乱（前）

ある日の昼下がり。午前中の勤務を終えて束の間の休息を取っていた勤め人たちが身なりを正して足取り重く仕事場に戻り始める時刻、事件は起きていた。

カフェやファミリーレストランが並ぶ大通りにある大手銀行の支店前。まるで来日した映画スターを一目見ようと空港に押し掛けたファンのような人だかりが出来ていた。それらが暴走しないように決死の思いで動線を確保している制服警官の内側で、気だるそうな様子で状況を見つめる刑事がいた。

「で、こんなアホなことをやらかして俺の至福の時間を台無しにしたのはどこのどいつだ？」

ノーネクタイで服はよれよれ。常にやる気ゼロの態度を身体全体から醸し出しているがその目つきは鋭い。身のこなしも見る者が見れば隙がないので手連な本性を隠していると気付くだろう。陣内宗則（じんないむねのり）警部とはそういう男である。

「少しは真面目な態度を見せておかないとまた小言言われますよ？それが私たちにまで飛び火するんですからね？お願いしますよ、警部」

深いため息をつくのは彼の部下でありお目付け役の友成史美（ともなりふみ）警部補である。適当を絵に描いた男とは対照的に生真面目すぎるほど真面目で実直を地で行く性格をしている彼女だが不思議なことに宗則との相性は良い。

「言いたい奴には言わせておけばいいんだよ。気にすんな。それで、状況はどうなってる？アホ野郎の身元は分かっているのか？」

近くにいた所轄の刑事に尋ねると、彼はビシッと背筋を伸ばし、敬礼しながら回答した。

「はいっ！人質の数は客と店員併せて二十名前後。容疑者は全部で四人。武装に拳銃とライフルを所持している模様。逃げ出した客の

話によると数回発砲しているようですが、幸いなことに怪我には出ていないとのことです！」
報告を聞いた陣内の顔が今にも雷雨が降ってきそうな曇天となる。これでもかと言うくらい脱力している。
「おいおい。その程度のことなら俺たちが出張る必要はないんじゃないか？拳銃とライフルなら問答無用の力技で解決だろうに。つかなんで特殊班が待機状態なんだ？さっさと突入させて終わりだろうが」
うんざり具合が三割増してただでさえ低いモチベーションがただ下がる宗則だが、この反応はしかしまっとうなものである。事実、手には最新式の機関銃を携えた特殊部隊が待機していた。だが彼らに動く気配がないものだから、宗則のフラストレーションはさらに高まる。
現代においては立てこもり事件が発生した場合、ある例外を除いて特殊部隊を用いて考えるまでもなく強硬策をとることが当たり前となっている。人質の安全を最優先にしつつもその心身面を考慮して迅速かつ確実に犯人を逮捕するためである。だが今回は慎重をきたさなければならない例外に該当していた。
「犯人のうちの一人がどうやら『魔術使い』のようでして・・・下手に刺激をしたら自爆の可能性もあるので動くに動けない状況です」
困惑した様子で話す刑事。宗則は舌打ちをしたが、爆発寸前の内心を考えればおさえ込めたほうだ。
犯人が魔術を学んだ者であった場合。それが慎重にならざるをえない例外事項である。
魔術が一般化されたのはずいぶん昔のことだ。存在自体は有史より確認されていたものの急激な速度で発展していく技術の影にいつしか隠れるようになっていた。
しかし転換期が訪れる。テロ支援国家と認定された某国に対して米軍が武力制圧をした際、一人の魔術師がその戦地に立った。彼は言った。

「私の力をもってすれば、敵を制圧することなど容易い。なぜなら私は、魔術師なのだから」
そしてこの言葉通り、彼はたった一人で敵軍を壊滅に追い込んだ。
この功績を米国は讃えた。
世界に激震が奔ったのは言うまでもない。
この『無血の掃討作戦』により魔術師は現行する通常兵器より効率性・利便性・機動性・戦略性が高いことが世界最大の軍国である米国が認めたのを契機となり、『魔術師』の育成に世界各国が着手しだしたのがちょうど半世紀前。その結果、優秀な魔術師を抱える大国同士で冷戦状態に入ったのが四半世紀前。世界は魔術を中心に回っていると言っても過言ではない。
話を戻そう。残念なことに魔術を学んだ者すべてが『魔術師』と呼ばれるわけではない。【日本魔術協会】――日本における魔術師を管理する組織――が定めた基準を満たしていなければならない。つまり『魔術師』とは名称独占の国家資格なのである。故に、試験を通過できなかった者は『魔術師』を名乗ることを許されず魔術を使える者、『魔術使い』と呼ばれる。だが当然のことながら、彼らが無能であるというわけではない。
魔術が大衆に広まり、学ぶ機会が設けられ、『魔術師』や『魔術使い』が多く存在している現代社会において、変化が起きたのは何も軍だけではない。警察・消防・救急などの国民の安全を守る組織にも劇的な変化が齎された。魔術を用いた救急治療により救命率は上昇、消防などの救助活動も生存者救出率が格段に上がっている。警察においては言うまでもない。このような立てこもり現場で活躍しているのは『魔術使い』である。ちなみに今この場にいる特殊部隊にも『魔術使い』が三名混じっている。
『魔術師』はその多くが軍属となるため日常的に人々が接しているのは『魔術使い』である。だからこそ犯罪に手を染めるのもまた然りであり、軍に比べて質の落ちる警察が慎重にならざるをえないのも致し方ない。

「動けない状況はわかった。今すぐにでも帰って寝たいところだが我慢してやる。その魔術使いの素性を教えてくれ」
「魔術使いの名前は沼骨浩一（ぬまぼねこういち）。属性・得意魔術は土。固有魔術は会得していません」
「そうだろうよ。固有魔術を会得していたら軍が放っておくわけがないからな。にしても土の属性とは・・・ますます面倒だ――――っと、野郎が出てきたな」
視線の先、自動ドアから一人の男が姿を現した。その男はがっちりとした体格で武術を嗜んでいることが見て取れる。宗則の目つきが獲物を品定めするものへと変わったのに気付いて史美はやれやれと肩を沈めた。
「もう気付いていると思うが俺は魔術使いだ！お前たち警察の武装を無力化することは簡単だ！」
試してみるかと言わんばかりに胸を張って両手を広げる沼骨。何名かが引き金に手をかけたが宗則がそれを制した。残念だが、彼が言っていることは本当だ。
「俺たちの要求は車の用意とヘリの準備だ！従えば人質には一切危害を加えない！もし応えられないと言うのなら、今すぐここで一人殺す！それから五分に一人ずつ殺していく！どうする！？」
自分は銃を含めたこの場にいる何にも負けないと言う自信が齎すむちゃな要求だが、警察に成す術はない。
「どうしますか警部？一応上の判断を仰いでみますか？」
やる気がないように見えて実は一番好戦的な上司に小声で話しかける。今日もその期待は裏切らず、宗則は口の端を釣り上げた。
「聞くまでもないだろうよ。目には目を。歯には歯を。魔術には魔術を、だ。構えろ、友成。先制して一気に制圧するぞ」
宗則と史美であれば沼骨を無力化するのは難しいことではないがそんな力任せを上が許してはくれるはずがない。魔術が絡むとごり押しできない弱腰体質は昔と何ら変わりない。しかし二人にそのような大人の事情は関係ない。それだけの権利が彼らには与えられてい

る。
「残念だが沼骨。警察としてはお前の要求を飲むわけにはいかないんだ。もちろん、人質は全員返してもらう。全員構えろ！」
現場を固める警官十数人が一斉に銃を構える。宗則の計画（プラン）はシンプルだ。警官達が一斉射撃をすると同時に宗則が突っ込む。仕損じた場合は後方に控える史美が仕留めるという力技だ。
だがここで誤算が起きる。発砲するより早く沼骨が魔術を発動した。手をかざした先の地面が瞬時に盛り上がり、そこにあったパトカーが宙を舞った。
落下先にいる野次馬たちが悲鳴を上げる。宗則は舌打ちをする。まさか沼骨がすぐに魔術を行使できるように予め魔力を練っていたとは。
だが彼に恨み言を言っている暇はない。対処すべく腰に備えた特注の警棒を手に、魔力を込めるが間に合わないのは火を見るより明らか。昼下がりのオフィスが地獄へと変貌する――――ことはなかった。空を飛んだ白黒カーはきれいさっぱり消えてなくなった。まるでどこかに遠くに飛んでいったかのように。
「人が戯れているから様子を身に来てみればいきなり大惨事一歩手前の事態になるとは・・・陣内さん、あんたがいながら何をしているんだ？」
慌てふためく人々を尻目に悠然と歩いて宗則達の元に近づいて来る男がいた。その左手には白銀に輝く銃を握りしめ、後ろには絵画から抜け出してきたかのような金髪の美女が着いている。
ここ光杯市（ひかりさかずき）に居を構えて探偵事務所を営む二人に宗則はもちろん、史美も絶大な信頼を置いている。
「助かったぞ、司。お前にはまた借りを作っちまったな」
「今さらですね。もう返せる量じゃないってことに気づいていますか？」
「司さんの言う通りです。私たちはもう貸し借りを言う間柄ではないですよ。気にしないでください」

苦笑を浮かべる男と微笑を浮かべる美女。一瞬にして緊迫の舞台に躍り出た二人だが、彼らに緊張は微塵もない。ゆっくりと、沼骨に視線を向ける。
「さて。自分が何をしたか理解しているな？」
問いかける口調は静か。だがそこには確かな殺気が含まれていた。周囲の温度が一気に下がる。
「魔術を持って人々を傷つけようとしたその罪は、許されるものではない」
一歩前に踏み出す。それに合わせて大男は一歩下がる。
「お前に許された行為はただ一つ」
銃口を向ける。先ほど一瞬にして車を無に帰した力を有しているそれは、恐怖を与えるのは十二分。ぽとりと落ちる大粒の汗。
「さぁ、命を賭して己の罪を償え」
沼骨は魔術使いとしては優秀な部類だった。だがこの場に緋瑪夜司が現れたことが、彼にとって唯一にして最大の誤算だった。

?－1：昼下がりの一波乱（前）（後書き）

こんばんは。
久しぶりの投稿です。
なんだかんだ忙しくてようやく一章のさわりを投稿できました。もう少しスピードと質を上げていきたいです。

?－1昼下がりの一波乱（後）

司達が現場に居合わせたのはまったくの偶然だった。三か月前から預かっている少女を含めた三人で偶には外に昼食を食べに行くかと意気揚々と出かけたはいいが思いのほか手痛い出費（美女なのに大食いであるレインが主な原因である）を被ったので寂しくなった財布を慰めるために銀行に寄ってみると人だかりができており、しかも緊迫した状況だったので先に少女を帰宅させて様子を見ていた結果が犯人であり魔術使いである男に銃を向けている現状と相成ったわけである。

「理解しているだろう魔術使い？俺とお前の間には高い壁があることを。自身の力ではどうにもできない絶望的な力量差を」

不出来な教え子に諭すような口調で話しかける。相手の戦意を根こそぎ奪うには、敵との実力差を自分自身で気付かせることが一番の近道である。司は続ける。今度は挑発の笑みを浮かべながら、

「お前の魔術は俺には通用しない。何なら試してみるか？もしお前の魔術で俺を倒せたらこの場にいる誰にもお前を止めることはできない。だがもし俺の言葉通りなら、お前たちは終わりだ」

沼骨の額からまた一つ汗が落ちる。だがその目には戦意が戻っていた。どうやら圧力による無意識の恐怖を司の嘲笑に対する怒りで上書きしたようだ。その様子に司は満足そうに笑った。

「来い、魔術使い。本物を見せてやる」

チャキリ、と銃口を心臓に照準。沼骨は目を閉じて精神を集中させながら右手を突き出す。

レインは万が一に備えて愛銃を手にしている（何処から出したのか）が相棒である司が仕損じることはないと信じきった眼差しを向けている。その隣にいる宗則と史美も司の実力を疑ってはいないが固唾を飲んで見守っている。そして魔術を学んだことのない警官達は突如現れた黒服の青年が負けたら自分たちに死が訪れるのではな

いかと不安の表情を浮かべている。三者三様の思いを抱いて魔術を学びし者達の動向を見守っていた。
張り詰めた緊張が破れた。先に動いたのは沼骨だった。裂帛の気合を吐き出して得意の魔術を発動させる。
地面がまるで津波のような波動となって司を呑みこまんと襲いかかる。
「・・・・・」
自身を包み押し潰すには十分なアスファルトの波を前にして、トリックが明らかになっている三流手品を自信満々に見せられて辟易したように、司は大げさにため息をついた。引き金を引き、自身の魔術を行使する。
「っな――――!?」
弾丸は発射されない。だが銃口の先。最大限の魔力を持って放った魔術が尊大な物言いをする闖入者の命を奪うことを確信していたが、ただ引き金を引いただけで消滅させられたことに沼骨は言葉を失う。めくれたはずの地面も元通りになっている。まるで魔術の発動そのものがなかったかのようだ。
「今度はこちらの番だ。覚悟はいいか？」
問いに対する答えを聞くより早く、司は三度引き金を、今度は素早くかつ四連続で叩いた。その間銃口は小刻みに動いた。そして結果は狙い通り。両肩両足を打ち抜かれて倒れ込む沼骨の姿があった。
「ぐぁあああぁぁぁ――――」
痛みに悶絶する大男を尻目に、自身の役目は終わったとばかりに司は愛銃を胸のホルスターに戻した。と同時に纏っていた戦意や殺気を脱ぎ捨てた。温和な口調で、
「敵の最大戦力は潰しました。中にいる連中は陣内さん達に任せます」
「おう、任された！待機中の特殊部隊に連絡！敵の魔術使いは無力化された！残ったメンバーは浮足立っている！この機を逃すなよ！突入！」

宗則の合図とともにプロテクトアーマを着こんだ男たちが次々と流れるように銀行内へと滑り込んでいく。残りの犯人達は皆非魔術使いであり、抵抗の素振りは一切見せることなく武装解除をした。制圧するのに十分とかからなかった。捕らわれていた人たちも全員無事に解放された。護送車に犯人を乗せるのを見届けてから、宗則は満足そうな笑みを浮かべて待たせていた功労者である司の元にやって来た。

「今回もお前の力を借りちまったな。毎度毎度悪いな」

「そんな笑顔で言われても説得力無いですよ」

はっはっはっと笑い飛ばす宗則についつい苦笑い。持ちつ持たれつの付き合いを初めてもうすぐ一年になるが、彼のこういうところは嫌いではない。

「それにしても、何回見てもお前の魔術は反則級だな。凄さと言うか凄まじさと言うか、間近で見ているといつも思うよ。お前だけは敵に回したくないって」

「そうですね。俺としてもあなたを敵にはしたくないです。頂くモノを頂いている間は味方ですよ」

にこりと不気味に笑う司に宗則は一瞬ひるむ。しかしこれは二人にとっては恒例行事みたいなものだ。そこに史美とレインがやって来た。

「緋瑪夜さん、お伝えしたいことがあります」

史美の手には証拠品袋が握られていた。その中にはブレスレットが入っていたが、それが単なる装飾品でないことは、この四人は知っている。

「緋瑪夜さんの推測通り、犯人はＷＥＥＤを所持していました。それもイシス社製の魔術師専用型です」

ＷＥＥＤ（正式名称／Ｗｉｔｃｈｃｈｒａｆｔ　Ｅａｓｙ　Ｅｘｅｒｃｉｓｅｄ　Ｄｅｖｉｃｅ）は魔術簡易発動装置と訳されており、その名の通り複雑な術式を簡単に発動するための補助装置である。

魔術は近代兵器を上回る攻撃力と近代兵器を無力化する強固な防御力を有しており、誰もが修得できる可能性があると言われているが、実際は言われている程万能ではない。
実行するためには使用する魔術を決定し、その対象を確定し、効果範囲を設定し、必要な魔力を生成し、魔法陣を形成（呪文の詠唱）して術を行使するという手順を踏まなければならない。この複雑かつ面倒な工程をクリアして発動するのに要する時間は一流の魔術師であっても十秒は要すると言われている。対して拳銃で引き金を引くだけなら一秒もかからない。故に、魔術が近代兵器に勝ることはあり得ないことだった。このＷＥＥＤが誕生するまでは。
ＷＥＥＤの最大の特徴は『魔術を一つの式として記録する』ということである。すなわちこれまでは魔術を発動するために複雑な工程を一から全て計算していたが、ＷＥＥＤでは予め簡単な式を作っておき、そこに必要な解を当てはめることで発動できる。時間が飛躍的に短縮されたのは言うまでもない。
ちなみに形状は銃であったりブレスレットであったりと様々であるが、それが有している『魔術発動の簡略』という機能という点においては違いない。今ではファッション性を重視したモノまで登場している。その機能も年々向上しており、当然のことながら質を求めれば求めるほど値段は上がり、自身専用機（オーダーメイド）となるとその額は三ケタ以上になることもあると言う。それだけ魔術を扱う者達にとってＷＥＥＤは必要不可欠なモノとなっている。
「国内大手のＷＥＥＤメーカーのイシス社の物か。それも専用型。魔術使いのあの男が持つには不釣り合いですね」
「そうだな。沼骨にそれだけ上等なモノを買えるだけの資金があったとも到底思えん。となると考えられるのは――――」
「後ろで糸を引いている誰かがいるってことですね」
司と宗則が同時に結論を出した。魔術師専用型はその名の通り魔術師が使うことを前提とされて作られているので機能性はもちろん魔力透過性（魔術の起動に必要な魔力が全体に渡る速さのこと）も

良いので必然的に高価な代物となる。しかしそもそも沼骨は魔術師ではない。挙句銀行強盗をするような人物だ。入手できるだけの金が手元にあったとは考えにくい。それ故に出された結論だった。
「ったく。厄介事が一つ解決したらまた一つ面倒事が増えたぜ。また残業が増えるじゃねぇか」
「それくらいの働きをしないと貰っている給料に見合わないですよ？」
「っち。本当にお前は手厳しいな。あれか、税金分は働けって言う口か？残念だが俺の給料に残業代と生命保証は入ってないんでね。ほどほどで勘弁してくれ」
　口をとがらせる宗則。まったくこの人は同じ公務員が聞いたら激怒するんじゃないかと思う台詞を簡単に言う。しかしそれがポーズであることを司は知っている。
「俺たちはそろそろ退散させてもらいます。傍から見たら部外者な俺達がこれ以上ここにいるのは色々まずいですからね」
　周りを見てみると突如現れてあっという間に事件を解決した凄腕の魔術師である司とその相棒である金髪美女のレインが、警察の中でも対魔術犯罪の専門家（エキスパート）である宗則と史美と親しそうに話しているのを見て興味を抱いた宗則の部下達がチラチラと様子を窺っていた。
「そうだな・・・お前もいきなりやってきて悪目立ちしたうえにレインちゃんはレインちゃんで目立つからな。今日のところは帰ったほうがいいな」
「俺は出来ることならひっそり暮らしていきたいんで、この辺りで失礼させていただきます」
「おぅ。進展があったら連絡する。もしかしたらまたお前の厄介になるかもしれないが、その時はよろしく頼むぞ」
「もちろん。きちんと料金を支払っていただければ。あなたの頼りになる探偵事務所ですから」
　この守銭奴が、と宗則は吐き捨てるがそれを無視してこれまで傍観していた史美に向き直る。

「史美さん。さっきの男には注意を払っておいてください」
「――――？どうしてですか？沼骨は魔術犯罪者用の特殊留置所に収監しますが？」
　彼女の疑問はもっともだ。魔術使いが罪を犯した場合、一切の魔術行使が出来ないように特殊な結界が張られた留置所に入れられることになっている。内部からはもちろん、外部から破壊しようにもそれ相応の魔術師でなければ不可能である。
「何者かが接触してＷＥＥＤを提供したとなれば再度接触してくる可能性は捨てきれません。特殊留置所に置いておく以上心配はありませんが、もし黒幕がＡ級以上の魔術師だったら突破されかねませんので」
「わかりました。それでは腕利きの魔術使いを警備に配置するようにします。まぁそれこそ魔術師だったら気休めにしかなりませんが」
「いえ、最悪の事態を想定してのことですので。もし本当に突破されたら俺達がなんとかしますよ」
　笑いながら司は言ったが、半ば本気だった。友人が制作した特殊結界は司でも壊すのは容易でない。むしろ友人は『司でも壊せない』と言うことをコンセプトにしていたので無理だとさえ思う。そんな最硬を誇る留置所の結界が破られるとは思っていないが、もしもの場合は警察の手には負えないのは火を見るより明らかだ。
「それでは俺たちは帰らせていただきます。事務所で雪も待っているだろうし。行こうか、レイン」
「はい。では陣内さん、友成さん、失礼します」
集まっていた人だかりは事件解決後から制服警官達により解散していた。二人は人波をかき分けることなく、悠然と帰宅の途に着いた。

?－1昼下がりの一波乱（後）（後書き）

しばらくぶりの投稿になります。ようやく半年以上にわたる就活の日々に終止符が打たれたのでゆっくりできそうです。なのでこれからはペースを上げていきたいですが果たしてどうなることやら（汗感想・もしくは誤字脱字などありましたら指摘したいただけたら幸いです。ではまた次回に。

閑話　事件の始まり

銀行強盗事件同日　深夜光杯市某所にて

「はぁはぁはぁっ――――――」

中年の男が息荒く闇の中を走っていた。彼はパニックで混乱する頭を必死に回転させて知っている限りの裏道を通り、幾度となく角を曲がり、迫りくる『死』そのものから逃れようともがいていた。

「はぁはぁはぁ・・・どうして奴が・・・」

彼は現行する医学では治療が困難な病を抱える人たちに対して魔術を利用した医療施設を直接自宅訪問して契約を取る単なる営業サラリーマンだ。多少強引に話を進めるようなことはあったけれど、だからと言って恨みを買うまでに至ったことはない。自分の仕事はあくまで施設への入院の契約であり、その後のことはその施設と患者との問題だ。たとえ事故で命を落としたとして自分が責められる道理はない、と男は考えていた。

「・・・許さない。お前達は絶対に、許さない」

「――――ひぃ」

フードを目深に被った死神――――声からして若い男――――が背後に現れた。完全に振り切ったと油断していた男は思わずその場で腰を抜かした。そして彼の口から出てきたのは当事者と自覚していない無責任な言葉だった。

「わ、私は悪くない！私はただ病院を紹介しただけだ！それなのにどうして私を殺そうとする？殺すなら病院の奴らを殺せばいいだろう！私は関係ない！」

「・・・・・・」

死神は何も言わない。ただ一歩ずつ前進し、男との距離を縮めていくだけ。言葉の代わりにその全身から殺意を迸らせながらゆっく

りと近づいていく。それは死へのカウントダウンに他ならない。
「た、頼む。命だけは助けてくれ。金ならいくらでもやる！なんなら私の古い友人が軍にいるから魔術師待遇でお前を入隊させるように手配もする！だから命だけは・・・！」
追いつめられた者の台詞としてはありきたりで使い古されたものだが、しかし男は目の前の死神から発せられる圧力（プレッシャー）によって、この絶体絶命の危機から逃れるためのアイディアはこれ以外に出てこなかった。
「・・・金も、名誉も、俺には必要ない。今の俺が求めるモノ。それは――――」
死神の右手が赤く燃える。
「や、やめろ・・・やめてくれ・・・」
男は四つん這いになって最後の逃走を試みる。
「――――お前の命だ」
鬱陶しく付きまとう羽虫を払うかのように右手を振った。男の身体が一瞬にして火に包まれ、肉が焦げた臭いと人間の形をした黒炭が完成した。しかしその出来栄えに一瞥をくれただけで、死神は再び歩き出した。自分には、まだ成すべきことが残っているから。
「待っててね、姉さん。あいつら皆、地獄に落とすから。俺達が味わった苦しみを、あいつらにも味あわせてやる」

かくしてここに、光杯市に恐怖をもたらした連続炎殺事件が幕を開けた。

閑話　事件の始まり（後書き）

こんばんはです。前回投稿から時間は経っていませんが、投稿となりました。ですので非常に短くなっております。
ようやく物語の始まりとなるわけですが、今後の展開としてはどうなることやら（汗）しかし全力で取り組んでいきますのでよろしくお願いします。
感想や誤字脱字などありましたらご指摘していただけると幸いです。
ではまた次回に。

?―2：依頼と脱走劇

光杯市は大きく分けて東の居住区、西の経済区、南の商業区、北の学業区の四つのエリアで構成されている。その住みやすい環境を求めて人が集まり、日本の大手企業――主に魔術関連の――が本社を構え、観光地としての施設も充実しており、さらに日本魔術協会が運営している日本で四つしかない魔術を学べる教育機関『聖杯学園』も創設されているので日本の首都の地位を脅かす存在となりつつある。

そんな華やかな街の数少ない悩みは犯罪発生率である。人が多く集まるからこそそれに比例して事件が多発してしまうのはどうしようもないことではあるが、九割近くは容疑者を逮捕しているので住んでいる人々にしてみれば治安はいいと認識している。だが何事においても例外は存在する。犯罪においても然り。魔術に関わっている企業や教育機関が圧倒的に多いこの街で、最も解決が困難なのが魔術絡みの犯罪である。無闇に犯人を追いこんでも返り討ちにあい、かえって犠牲者を増やす結果になりかねないのがその理由の一つである。これ以外の理由として、そのような犯人を絶対的な力でねじ伏せることのできる魔術師（魔術使い）が警察組織にはまだまだ少ないからである。そして、そんな彼らに手を差し伸べる存在がこの街に居るのは必然と言えるだろう。今日も頭を悩ませる男が彼らの元を訪れる。

「どうしてこんなところに事務所を構えているんだか・・・」

その悩める男、陣内宗則は数え切れないほど訪れた友人の探偵事務所を前にして毎度の疑問を口にしながら嘆息した。

南の商業地区は観光地となっている。土日になると人でごった返す大型ショッピングモールや夏になると大賑わいするプール施設。冬には温泉旅館などこれら以外にも様々な娯楽が集まっている。そんな中にあって異彩を放つのがこの探偵事務所である。

「息抜きが手足らに遊びに行くことができるからと言うのがその理由だろうな。まったく、あいつらしいと言えばあいつらしいな」
陣内の隣には四季を問わず着ているため色あせしつつあるコートを羽織った女性が立っていた。長い髪をひとくくりにまとめ上げ、煙草をくわえているがその姿が実によく似合っている。
「どうしてあなたがここにいるのかも私にはわかりませんけどね」
そして彼女は魔術の世界において五本の指に入るくらい有名な人物であり、人前に姿をさらすことが少ないことで知られていた。
「いちいち細かいことは気にするな。さぁ行くぞ。君もあいつに用があるのだろう？」
そして宗則は、女性とともに完全禁煙な事務所に足を踏み入れた。

「まったく・・・先週会ったばかりだって言うのにあなたって言う人は。少しは威信とか意地とか誇りとかはないんですか？と言うか少しは持ってください」
「会うなりいきなりその言い草は、せっかく来た客に対してひどいだろ」
「甲斐性なしの公務員にかける言葉にしては優しい方だと思いますけどね」
司はあきれ顔で開店一番でやって来た依頼主に嫌味を吐いた。税金で生活している警察官が一般社会から見れば外れた職業に思われる探偵の元に自腹と言っても血税を払って捜査協力を申し込むのは決してよろしいことではないだろう。だが司が気にしているのはこの点ではなく、困ったらすぐにやってくる宗則の姿勢である。少しは自分で事件を解決する努力を見せてもらいたい。
「それで、早紀の要件はなんだ？まさかとは思うが、お前も依頼があるとかじゃないだろうな？」
「私が君に頼みごととなったらそれこそ世も末だ。なに、君が私に

応急処置を押しつけた『患者』の経過が気になってね。近くを通りかかったものだからついでに寄ったんだ。あの子は今どうしてる？」
藤壺早紀（ふじつぼさつき）。それが宗則とともにやって来た女性の名であり、司と肩を並べるほどの実力を持つ魔術師である。彼女の専門は人形作りであり、限りなく人間に近い人形を作ることを目指している人形師でもある。そのため人体の構造について熟知しているので治癒魔術を体得しており、また結果魔術も彼女の得意分野である。ちなみに魔術犯罪者を収容している施設には彼女が考案した結界が張られており、いまだかつて脱獄者は出た事はないほど堅牢なものである。
「雪なら元気にしているよ。今は実家の方に戻っているよ」
「そうか。すでに三か月がたっているからな。日常生活に戻れるレベルには回復するか」
「いや、これに関してはさすが『最智』の魔術師としか言いようがないな。あの状態から持ち直せたのはあんたの力があってこそだ」
「私がしたのは薬の副作用で失われた魔力やら生命力やらを集めて止まっていた心臓を再起動しただけだ。薬の効力そのものを体内から消したのは他ならぬお前じゃないか。そうだろ、『最優』の魔術師？」
「今あんたが言ったことがどれほどすごいことか。学園の教師が聞いたら腰を抜かすどころの騒ぎじゃないぞ」
魔術を行使するのに必要不可欠なのが魔力である。その魔力の源となりうるのが生命力である。また個人によって魔力量は違っている。それによって扱える魔術に差が生まれる。つまり自身の許容を超える魔術の行使や魔術の連続使用は魔力を枯渇させ、場合によって命にかかわる事態となる。そうなった場合、基本的に休養することが一番なのだが、あの時は一刻を争う事態だった。そこで彼女が行ったのは、魔力が無限にあると言われている外界、すなわち自然エネルギーを自身の魔力と融合させて送り込むと言うことだ。自然エネルギーを魔力運用できるのは現存する魔術師の中では早紀を含めて二人。しかし早紀はそれを自身の魔力として扱うことはできな

い。あくまで治療や自身の人形に送入するのみだが、もう一人は直接魔力として扱うことが出来る化け物である。故に『最厄』の魔術師と呼ばれているのだが。

「そんなことはどうでもいい。そろそろ俺の話を聞いてくれないか？せっかくレインちゃんが淹れてくれたコーヒーが冷めちまう」

司と早紀が会話をしている間、（一応）依頼主である宗則はレインが淹れたコーヒーを飲まずに切り出すタイミングを伺っていた。その結果がぬるくなったコーヒーである。

「レイン、この人にコーヒーを淹れる必要はないっていつも言っているだろう？」

軽口をたたきながらも司は交渉のテーブルに着く。相手が友人であり公務員であっても訪ねてきた以上は彼の客である。加えて宗則の依頼となれば無視するわけにはいかない。それだけの理由があるからだ。

「一応聞きたいんだが。魔術で人を燃やす場合、その対象である人だけを燃やすことって難しいのか？」

「・・・俺より早紀の方が詳しいと思うが？」

ぼんやりと窓から外を眺めていた早紀はレインから渡されたコーヒーを啜りながらめんどうくさそうに質問に回答した。

「話を振られた以上は答えてやるか。周囲になんら影響を与えず、自身が対象として選んだ物体のみを燃やすことはそれなりの技術がいる『侵略すること火の如し』という言葉があるだろう？その言葉通り、そもそも火を主とする魔術は対軍戦においてこそその真価を発揮する中・広域魔術がほとんどだ。対人魔術もないこともないが、その場合も周囲の『爆発』であって『燃焼』ではない。ましてや個人の『爆破』となると使える奴は協会に所属している魔術師の中でも限られる。それ故に、お前の質問に対する答えは司と同じくイエスだ。難度は高いが出来ないことはない。その代わりそれ相応の魔力と空間設定能力やらその他諸々が必要になるけどね」

話し終えてカップを口に運ぶ。そしてそんなことといまさら聞くま

でもない上に話させると不満の表情で宗則を睨みつけた。司も正直彼の質問の意図するところがわからなかった。魔術を学んだ者なら誰もが知っている常識をなぜ。

「そうか。藤壺さんの言うことが本当なら、今回の犯人は相当な魔術師と言うことになるな」

「陣内さん、もったいぶってないで本題に進まないか？」

「あぁ、そうだったな。すまない。なにぶん俺もこういう事は初めてだったんでな。こいつを見てくれ」

苦笑いを浮かべながら宗則が手にしていた封筒から数枚の写真を取り出してテーブルに並べた。そのどれもが路地裏での写真。そこに移っているのは黒炭と化した五体満足の遺体であった。それも二つ。

「・・・なるほど。これは確かに陣内さんがおかしくなっても無理ないな」

「写真を見る限り遺体の周囲には燃えた跡がない。相当な魔術師だな、この芸術家（はんにん）は」

「今回の犯人も厄介そうですね」

司は合点がいった表情を浮かべ、早紀は気が狂った犯人に対して賛辞を贈り、レインが総括した感想を述べた。だが三人には通じて余裕があった。困惑しているのは宗則含めた警察関係者だけのようだ。宗則はため息をついた。

「確かに早紀の言うとおり相当な魔術師であることには変わりない。警察で何とかしようとしたら陣内さんか史美さんでなければかえって犠牲者が出る。それくらいの魔術師です。まぁ本物かどうかはわかりませんけどね」

皮肉交じり言いながらコーヒーを嗜む。彼の発言に驚いたのは宗則だけで、例のごとく他の二人も同様の見解に居たっていたようだ。

「本物かどうかって・・・もしかしてこの犯人は例の薬をやっているっていうのか？」

宗則の疑問に答えたのは早紀だった。

「その可能性は極めて高いだろう。さっきも言ったがこのレベルとなると魔術師でないわけがない。魔術師であるならば協会に登録されているはずだ。もちろん確認はとったのだろう？」
「もちろんです。魔術絡みの事件が起きた場合は例外なく協会に問い合わせることが義務付けられていますからね。結論は非登録でしたが」
「となるともう答えは見えたようなものだ。薬を使って能力を底上げした魔術使いが犯行を行っている。それ以外には考えられない」
　司が推理に結論を付けた。だが肝心なことは何も分かっていない。
「誰がやったかは俺達の方でも調べていきますよ。それで、この二人の被害者に接点はあったんですか？」
「接点に関しては今のところないな。一人目の被害者は営業マンだし、二人目の被害者は医療器具メーカー勤務だ。二つの会社の間に取引は行っていないし、彼らが知り合いであると言う証言は今のところ得られていない。うちとしては無差別殺人と踏んでいるんだが、お前はどう思う？」
「そうですね・・・確かに見たところ接点はありませんね。ただ」
「――ただ、なんだ？」
　手にしていた捜査資料――持ち出し厳禁の代物――から一旦目を話して、
「自分の目で確かめてみないことには何とも。これだけ高度な魔術技能を扱える奴が単純に無差別に殺人を犯すとは考えにくいですからね。まぁなんにせよ、調べてみますよ。これ以上この街で好き勝手されるのも気分が悪い」
「そうだな。俺としてもこれ以上被害を出すわけにいかない。早く事件を解決しないと上からまた文句を言われちまう」
「まったく。これだから史美さんの苦労は絶えないんですよ。少しは彼女のためにも真面目に仕事してください。そうすれば、俺も楽ができるんでね」
　嘆息する司に、俺はいつもで真面目だと胸を張る宗則。やれやれ

と肩をすくめながら司は立ち上がった。早きに行動を起こすに越したことはない。これが依頼話の終了の合図となり、釣られた形で宗則も腰を上げる。相棒であるレインはいつの間にか司のジャケットを手にして待機している。まるでメイドだなと早紀が呟いたのは当然のこと。

「陣内さんはこれから署に戻るんでしょう？外まで一緒に行きますよ」

「早速動き出すとは仕事熱心だねぇ。俺としては助かるが。っと、電話か」

請求する額をいつも以上にふんだくってやると心に誓いながら四人は外に出た。五月も半ばに差し掛かっており、時折吹く風も暖かくなってきている。何も考えず散歩するにはもってこい陽気だが、宗則の怒声によってそれも吹き飛んだ。

「――――なんだって！？それは本当か友成！？」

どうやら電話の主は友成史美のようだ。滅多なことでは動揺しない宗則が思わず叫ぶほどの事態が電話の先で起きているということなのだろうか。

「何かあったのでしょうか？雰囲気からして何かトラブルが起きたようですが・・・」

「あぁ。あぁ、わかった。ちょうど今司たちと一緒にいるから急いで向かう。俺達が着くまでの間の指揮はお前が取れ。なに！？私には無理だって！？無理でもなんでもやり通せ！落ち着いたら司とのデートをセッティングしてやるから！」

「・・・当事者の知らないところで話がよからぬ話が進んでいるようだな」

「デート・・・司さんとデート・・・」

「レイン？いやレインさん？顔が大変なことになっていますよ？」

暗黒面に落ちかけている相棒を必死に呼び戻そうと司は慌てふためく。そうこうしているうちに元凶である宗則が電話を終えた。

「すまん司。調査は後回しにしてくれ。これから俺と一緒に魔術犯

罪者収容施設に来てくれ。出来れば藤壺さんも一緒に来てくれますか？」
「・・・何かあったのか？」
口調が柔和な形から仕事モードに切り替わり鋭くなる。宗則はうなずき、
「この前逮捕した沼骨が、施設の結界を突破したそうだ」
「・・・それは本当なのか？」
尋ねたのは結界を考案した張本人である早紀だ。彼女自身が一から術式を考え、形成した『自信作』を、ＷＥＥＤを持たない半端な魔術使いに突破されたのだから心中穏やかであるはずがない。
「えぇ、最悪なことに事実です。檻ごと結界を破壊して自身のＷＥＥＤを奪還。正面切って抜け出すつもりらしい。幸いにもお前の忠告を聞いた友成が警戒にあたっていたおかげでまだ突破はされていないとのこと。どうにかして三十分、我々が到着するまでの時間を稼ぐようにと指示を出しましたが微妙とのことです」
「急いだ方がよさそうだな。レイン、お前は『空間転移（ムーブディメンション）』を使って先に行け。手加減する必要はない。場合によっては倒してもかまわない。俺達も車で追いかける」
「わかりました。戦力を奪って無力化します。では、お先に」
「頼んだぞ」
短いやり取りを終え、レインは消えた。おそらくこの瞬間に彼女は現場に到着し、陣頭指揮を執っている史美の援護に入っていることだろう。
「俺達も急ぐぞ。レインが向かったとは言え、相手は早紀の結界を破壊した奴だ。何があるかわからない」
「私の自慢の作品を壊したツケはきっちり払ってもらわないと私の腹の虫も収まらん」
司の車に早紀が乗り、宗則は愛車に。各々の思いを秘めて、彼らは現場へと急ぐ。

?―2：依頼と脱走劇（後書き）

こんばんは。
ようやく投稿に至りました。今秋のアニメはどれも面白いのでそちらに意識を取られないように頑張っていきます。次話も可能な限り早くあげられるよう努力していきます。
誤字脱字、もしくは感想があれば気軽にお願いします。
ではまた。

?－2：夢現の邂逅と金砂の援軍

逃亡前夜　光杯市某所・魔術犯罪者収容施設『ナーストレンド』

　その人物は完全に景色と同化していた。深夜であるにも関わらず監視塔によって昼のように明るい敷地を堂々と歩いているにもかかわらず、それ人物は見周りの警備員にその存在を認識されることはない。

「――――うっ」

　一人、また一人と認知の外側からの手刀によってその意識を確実に刈り取り、難攻不落と謳われている施設を無力化していく。正面の入口からまるで自分の家に帰って来たかのような気楽さで中へと入り、目的地を目指す。

「これが噂の結界か・・・なるほど大したものだ。『最智』の魔術師の面目躍如と言ったところか」

　この施設が魔術を悪用した者たちを収監していながらいまだかつて脱獄者を許していないのには理由がある。その一つが施設内に張り巡らされている魔術封じの結界である。効力はその名の通り、結界内における魔術の使用を封じるものである。例外として施設内の魔術師（魔術使い）の魔力を結界の対象外に設定することで、登録を受けた者は魔術を行使することが可能である。

「対象を魔術の行使と大枠を定めつつそれを埋めるかのように属性ごとに禁止するために一つ一つ細かく設定もしてある。複雑な術式だが実に無駄がない。完璧だ」

　まるで他人事のように自身に適応されている魔術を称賛している。本来ならば侵入者であるこの人物にとっては得意な魔術を封じられて冷や汗をかくところであるが、その顔には笑みが浮かんでいる。

「だが悲しいかな。それを行使する魔術師が、半端者では意味がな

い」
　再び魔術を発動させる。特に問題なくその人物は再び空気に溶け込んだ。結界を考案し、その術式を構築したのがこの国で五本の指に入る超一流の魔術師であっても、それを発動させる魔術師が二流・三流では宝の持ち腐れである。故に、この人物にとってこの結界は『この程度のモノ』にしか感じないのであった。
「さて、真夜中の社会科見学（ピクニック）を存分に楽しむとしよう」
　そして悠然と歩き始める。タイムリミットである夜明けまで時間はたっぷりある。急ぐ必要はまったくなかった。
　とは言ったものの、その時間は呆気なく終わった。ここの施設の名前でもある大規模魔術封じの結界『ナーストレンド』以外にも侵入者及び脱獄を企てる者達の五感を狂わす幻術など多種多様な対策が施されており、また施設自体も迷路のような複雑な作りになってはいたがすんなりと目当ての人物が収監されている場所に到着した。その道中で遭遇した警備員は五名いたがこれも赤子の手をひねるようにして無力化した。もう少し楽しめるかと思ったが残念だ。拝借したカギを手に、謎の人物は牢屋の前に立った。その中には男が一人、横になっていた。
「起きたまえ、沼骨浩一」
　その男、沼骨浩一は重たい瞼を無理やり開きながら振り返った。深夜の来客にまだ意識が覚醒していないためか、まだ事態を理解していないようだ。頭上に？マークが浮かんでいるのがわかる。
「喜びたまえ、沼骨浩一。人生をかけた大勝負に負けて未来を諦めている君に私から素敵なプレゼントだ。受け取りたまえ」
　そう言って差し出された物に、沼骨は目を見開いた。眠気はどこかに飛んで行ったようだ。その様子に侵入者に笑みがこぼれる。
「君のＷＥＥＤだ。もちろん保管庫にあったやつを拝借してきた。あぁそれと、ここに来るまでの間に少しそいつをいじっておいた。『これから』の君にぴったりと合うように調整したんだ。喜びたまえ。それともう一つ――――」

懐から取り出したのは赤い液体が入った注射器だった。魔術を学んだ者なら見た事はなくてもその存在を一度は耳にしたことはある禁断の代物である。沼骨はゴクリと思わず唾を飲み込んだ。救世主の笑みは崩れない。

「あなたがあなたとして最大限の力を発揮させてくれるモノ。その正体は言わなくてもわかっていますね？」

「これを俺に渡して、あんたに何の得がある？そもそも、あんたは一体何者だ？」

「ただ私はあなたにチャンスを与えたかっただけです。そこに理由はありません。魔術を学びながら正当な評価を得られていないことに不満を抱いたまま生涯を終わらせるのはもったいない。あなたならばこの力を制御できると確信があるからこそ、こうして私はやって来たのです」

沼骨にとって、これは天使からの救世であると同時に悪魔のささやきであった。自分に足りないのは努力ではなく才能だと痛感している。自暴自棄になって銀行強盗に加担したがこれまで出会ったことがないほどの力を持った魔術師に完膚なきまでに叩き潰されて刑務所暮らしだ。だが、目の前にいる人物が手にしているモノを受け取れば欲しかった『力』も手に入り、それを存分に使うことが出来る。彼にこの申し出を断る理由はなかった。

「あなたなら受け取ってくれると信じていました。では私はこの辺で。あなたの未来に輝かしい希望があらんことを。失礼」

指を鳴らすと同時に謎の人物は姿を消した。その瞬間、沼骨は既視感に襲われた。先ほどまで眠りに堕ちていたはずなのに何故、自分は身体を起こしているのか。何故、押収されたＷＥＥＤが手元にあるのか。何故、魔術師にとって悪魔の薬である『血の記憶（ハイマメモリア）』を手にしているのか。沼骨には心当たりがなかった。

翌日・光杯市某所・魔術犯罪者収容施設『ナーストレンド』

開設以来、いかなる魔術犯罪者の脱獄を許さなかった砦は騒然としていた。警備にあたっていた職員の多くが大なり小なりの傷を負い倒れている。魔術界において『最智』と謳われる魔術師が考案した結界は力技により無理やり解除されてしまった。本来ならば収監されている全ての魔術犯罪者が逃亡に至ってもおかしくはないのだが、偶然居合わせた警視庁対魔術犯罪対策課、通称『零課』所属の友成史美がダウンした魔術式に魔力を送り込むことで即座に結界が再起動されたことにより最悪の事態は回避していた。だが、問題の根幹は依然として残っていた。

「敵を敷地外に出してはいけません！なんとしてもここで食い止めてください！そのためならいかなる手段を用いても構いません！」

施設の敷地。建物から逃亡者である沼骨浩一は出ていたが、史美はなんとか彼が外に出る前に戻ってくることができた。結界の制御室に居た事が幸いしたことに加え、ここに居る全職員の奮闘の賜物である。ここからは先は自分の役目だ。

「沼骨浩一。今すぐ施設に戻りなさい。さもなければ容赦はしません」

「あんた・・・あの時現場に居た刑事だな？あの頃の俺に対して何もできなかったあんたが、今の俺に勝てるとでも思っているのか？」

広大な中庭でにらみ合う両者。それを見守る警備員たち。史美が破れたその瞬間に脱獄は成功する。彼女以上の魔術師がここには存在しないからだ。

「司さんの言っていた通りです。あなたを監視しておいてよかった。そうでなければ『これ』を持ってくることはなかったです」

史美は肩にかけていたケースを開けた。そこから出てきたのは主に儀式などに使われる梓弓。だがこれは立派なＷＥＥＤであり、彼

女にしか使えない特注品だ。標的を定めて構える。しかし本来武器である弓に必要不可欠なモノがない。
「なるほど。敵を射抜く矢の代わりが貴様の魔術と言うわけか。いいだろう、受けて立つぞ」
沼骨の魔術師として――――正確には魔術使いとして――の能力は甘く見積もっても高い方ではない。それ故に、逮捕・収監した時点で『最智』が考案した大規模結界『ナーストレンド』を単純な魔力の放出だけで破ることは不可能なはずだった。だが現実として彼は今こうして多くの負傷者を出して自分の前に立っている。一応上司である陣内には連絡してある。司とともにここに向かっているはずだ。ならば自分がしなければならないことはさらなる時間稼ぎ。史美は全力でその任務を全うすると決め、それにふさわしい魔術を選択した。
「恍惚の天樂（てんがく）と演舞、其を魅せるは幻惑の絢爛舞踏会。鳴り響け、共鳴せよ、音叉の閃きよ！」
史美が蠱惑的な声で呟いたのは魔術発動の鍵となる呪文。現代の魔術において本来ならば呪文は必要ない。だが友成家は古来より言霊を用いて呪術を行使する暗殺専門の家系であった。その手法は現代にも受け継がれているが、それを史美は現代魔術に応用し、あえて呪文を唱えることで言霊の付加をかけて魔術の効力を増大させる技術を考案・実用化に成功した。これは日本に数多く存在する古来の魔術を代々受け継いできた家々に衝撃をもたらした。
さて置き、史美の魔術が発動した。彼女が弓を鳴らすと同時に中庭は大きく揺れた。地面ではなく空気が。強烈な音が鳴り響いたのだ。その効果によって沼骨は膝から崩れ落ちたりした。立ち上がろうとしてもふらふらしてすぐに倒れてしまう。人間の平衡感覚を支配する三半規管に空気の振動によってダメージを与えることでバランスを狂わせる。まさに彼は天と地がさかさまになったかのような感覚を味わっていることだろう。無論、対象は沼骨だけである。
「グ・・・ガハァッ――――」

喉から漏れる苦悶の声。史美の魔術は第二段階に移行した。
「無駄です。この術の前に無理に身体を動かそうとしても三半規管が狂っているので立ち上がることは不可能です。仮に立てたとしてもバランスを保つのが精一杯で反撃する余裕はないはずです。それに今、あなたはまともに息ができない状態にあるはずです」
空気の振動はやがて対象者の周囲の気圧を減らしていくモノに変化する。その急激な変化にやがて身体が意識を保つことを放棄する。これが史美の固有魔術『地昇天落（ちしょうてんらく）』である。
「俺は手に入れたんだ・・・！『血の記憶（ハイマ・メモリア）』で誰にも破ることはできないと言われてきた結界を破るほどの力を！この力をもってすれば・・・この程度の魔術など――――！」
莫大な魔力の奔流が沼骨の雄たけびとともに身体から迸る。物理的な干渉力を持たない魔力が、それ自体が波動となって周囲に爆散したことにより地面を抉る突風を生み出した。当然、史美の魔術は跡形もなくかき消され、また沼骨の取り囲んでいた警備員たちを吹き飛ばした。
「ふはは・・・フハハハハハッ――――――！どうだ！これが俺の手にした力だ！さぁどうする！？お前に俺を止められるか！？」
「光の射手。疾走する騎士。光乱煌めく聖矢をもって。邪気払う聖剣をもって。立ちはだかる悪鬼を悉く射ち滅ぼさん！」
内心で舌打ちしながら、史美は素早く魔術を発動させる。足止めがこのような形で失敗した上に優秀な魔術使いである警備員も大半が戦線離脱を余儀なくされた。ならばここから先は力がモノを言う世界。出現した光の矢を装填し放つ。爆発音が響き渡る。直撃した。防御は間に合わなかったはずだ。さすがに死んではいないだろうが戦力を奪うことはできたはず。史美はそう確信した。
それが命取りとなった。土煙が消えるより早く、土石流が押し寄せてきた。そのスピードは以前銀行強盗の際に司に向けて放った時より格段に速い。一度弛緩した意識を立て直して回避するのは不可能だ。

「危うく仕留められるところだったが残念だったな。今の俺の魔術発動速度は並みの魔術師のそれを遥かに超えている」
爆心地にはほとんど無傷の沼骨が立っていた。まだ残っていた警備員達は絶望した。史美が倒された以上、あの男を止めることはできない。
「なるほど、確かに魔術の発動は速いですね。ですが、反応速度は並み程度ですね」
何処からともなく聞こえてきたのは女性の声。しかし史美ではない。その人物は負傷者した者たちを護るように、沼骨と向かい合っていた。その隣には史美もいる。
「ありがとうございます、黒月さん。あなたがいなかったら私は今頃あの土砂に埋もれていました」
得意の空間転移魔術を用いて戦場に自慢の――――司に褒められた――金髪を煌めかせて黒月レインが戦場に舞い降りた。史美が矢を放つのとほぼ同時に彼女は到着した。そして沼骨の反撃を察知してすぐさま史美を救出したのだ。
「気にしないでください。それよりもあの男・・・沼骨と言いましたか。彼は例の薬を打っていますね？魔力及び魔術の威力増大、魔術発動速度の上昇。これらから察するに第二段階まで進んでいるようですね」
「そうですね。私の『破魔煌矢（はまこうや）』を防ぎながら同時に攻撃に移行した点を見てもそれは間違いないと思われます」
「司さん達が到着するまで少なくとも二十分。それまでは私達で彼を食い止めます。友成さんは援護を。私が前線に出ます」
ほとんどの場合レインは司と一緒に戦場に立つ。その際彼女は彼のサポートとして後衛に回ることがほとんどだ。故にレイン自らが先陣を切って戦うのは珍しく、史美が驚いたのは無理もない。
「大丈夫です。無理はしませんから」
にこりと笑い、レインは一歩前に踏み出した。それを見た沼骨が次なる獲物を見つけたとばかりに醜悪な笑みを浮かべる。

「作戦会議はもういいのか？」
「えぇ。あなたをどうにかするのに細かい作戦は必要ないので」
先制の早撃ち（クイックドロウ）。打ち出された弾丸が沼骨目掛けて一直線に疾走する。問題なく直撃する。その結果、余裕の態度を見せていた沼骨に動揺が走った。塗装がはげたかのように、彼の顔面を覆っていた土の膜が飛び散った。これが史美の一撃を防いだ魔術の正体（からくり）だ。
「所詮あなたの力はメッキ。本物の偽物になり果てたあなたに、私を倒すことができますか？」
不敵な笑みを浮かべる美女。史美は改めて実感した。彼女はあの『緋瑪夜司』が隣に立つに相応しい人物（パートナー）と認めた数少ない魔術師なのだと。
「誰が偽物だっ！俺は本物の魔術師だ！魔術師になったんだ！そうでなければ俺はこうしてここに立ってはいない！」
激昂する沼骨。その怒りに呼応する形で魔力量がさらに増大していく。また心成しか彼の身体が徐々に膨張しているようにも見える。
「肉体の変容・・・第三段階に移行しつつあるようですね。ならこちらも手加減はしません。行きます！」
最優にして最強、そして相棒である魔術師（つかさ）が来るまで残り十五分。沼骨の状態から時間稼ぎは困難。無力化するつもりで挑む必要がある。レインは自信専用の拳銃型ＷＥＥＤを握る手に力を込める。
「偽物に堕ちた者よ。本物（つかさ）が来るまでの残り時間、私（あいぼう）が相手になりましょう」
「お前は殺す！この手で必ず！」
沼骨が叫び、レインは舞台に立つ演者のごとく宣告する。
「あなたの罪、私が撃ち抜く」

?―2：夢現の邂逅と金砂の援軍（後書き）

お久しぶりです。ようやく区切がついたので投稿となりました。楽しんでいただけたら幸いです。
段々と暦通りの季節になりつつありますね。寒くなっていくので風邪に気をつけていきましょう。
それでは、感想などありましたらお願いします。
ではまた次回に。

?―2：過ぎた力、哀れな末路

黒月レイン。『魔弾の射手』もしくは『幻影の魔女』の異名をとり、緋瑪夜探偵事務所にその身を置いている魔術師にして『最優』の魔術師として知られている緋瑪夜司の現パートナーを務めている女性。

その容姿は美麗の一言に尽きる。腰まで伸びた髪は染料で染めた贋作とは違う、生まれ持っての流砂のごとき金色。見るものすべてを魅了してやまない美貌の持ち主だがそれを鼻にかける態度は一切見せない。まさに完璧な女性である。

それはさて置き、レインは宣告と同時に行動を起こしていた。彼女得意の空間転移の魔術を行使して瞬時に敵の、沼骨の背後に回っていた。手にしているＷＥＥＤの引き金を躊躇いなく引く。風を纏った弾丸が射出される。そして結果は同じ。顔面の塗装が抉り取られる。

「貴様ぁあぁぁぁ――――――！！」

沼骨は激昂し、己も魔術を発動させる。レインを貫かんと足元が鋭い棘となって盛り上がる。しかしその空間に彼女の姿はすでになく、

「ぐはぁっ――――」

再び空間を跳躍したレインの一撃を食らった。身体的ダメージはそれほどではないが、それ以上に沼骨は精神的に多大なダメージを被った。こちらの攻撃は当たらず、一方的に殴られ続ける。いくら身体を土の防護膜で覆っていたとしても限界はある。だが打つ手がないのはレインとて同じ。

「なるほど。あなた自身にダメージを与えるためには『エウロス』では無理なようですね。それなら――――」

レインは持ち手を左手に変えて、三度ＷＥＥＤを構える。対する沼骨もレインの魔術発動を見逃さんと目を見開き、鋭敏になった感

覚を総動員して身構える。彼が狙いとするのはすなわちカウンター。レインの魔術をあえて先に発動させて一瞬遅れでこちらの魔術を発動させる。絶対の防御の自信があるからこそ出来る捨て身の戦法である。だがこの時点で沼骨は決定的なことを見過ごしていた。もし彼がレインの手にしているＷＥＥＤが先ほど手にしていたモノと別物と気づいていれば多少なりとも結果は変わったかもしれない。そしてそのことが勝敗を分けることとなる。

レインが引き金を引く。だがその銃口から必殺の弾丸は射出されなかった。その代わりに沼骨を襲ったのは、爆発だった。目の前で手りゅう弾が炸裂したかのような威力。追い打ちをかけるようにそれが二回、三回と沼骨を襲う。カウンターを狙っていた側が不意打ちを食らったのでダメージは大きいはず。前のめりに倒れ込んだことから見て明らかだ。レインは史美に合図を送る。それを受けた史美が残った警備員達に拘束術式の展開を指示した。彼らは丁寧かつ迅速に沼骨の自由を奪った。

「お疲れ様です。これが噂の『ノトス』ですか。転送と転移のタイミングがほとんど同時な上に発動も一瞬だったのでわかりませんでした。さすがですね」

「まさか『ノトス』を使わなければいけなくなるとは思っていませんでした。さすがは第三段階と言ったところですね。まぁその代償は高くつきますけどね」

レインの視線の先、手足の自由を奪われた沼骨が苦しく呻きだした。喉を掻き毟り、身体をよじらせ苦痛に顔をゆがめている。史美は何事かと事情を知っていそうなレインを見る。

「過ぎた力は身を滅ぼす。つまりはそういうことです。膨らんだ風船に穴があけば一気に空気が抜けて萎むように、練達級魔術師に匹敵する力を得た彼の肉体に限界を超える傷を負ったことで生命力が失われているのです」

彼女は淡々と事実を述べながら、言葉を失い絶句する史美に目もくれず死の階段を猛スピードで駆け降りる沼骨の顔元に膝をついた。

「残念ながら、私ではあなたを助けることはできません。そして残念ながら、あなたを救えるであろう唯一の人は間に合いません」
「そんなことは俺が一番わかっている。それに助けて貰おうだなんて思っていない」
今にも消え入りそうな声で沼骨は言った。
「ですが、私は私の仕事をしなければいけません。だから一つ質問をします。『血の記憶（ハイマメモリア）』は誰から渡されたのですか？」
毅然とした態度でレインは尋ねた。そこに絶命寸前であることに対する遠慮や配慮はない。
「・・・・さぁな。覚えていない。・・・目が覚めたらＷＥＥＤと一緒に手元にあった。ただ・・・」
「ただ、なんですか？」
「夢で・・・誰かに会った。そいつに・・渡された」
「それはどんな人だったんですか？」
「さぁな。それを調べるのが、お前達の仕事だろう。せいぜい・・・頑張ることだ」
最後に嫌味を残して沼骨は絶命した。レインは立ち上がり、苦虫をかみつぶしたかのような表情を浮かべる。結局『血の記憶』の入手経路は分からず、得られた情報はにわかに信じがたいものだった。これでは捜査のしようがない。加えて沼骨が生きているならまだしも副作用で死んでしまったのも痛かった。これでは司に合わせる顔がなかった。
沼骨が息絶えてから数分後。息を切らして到着した司達にレインと史美は事の経緯を説明した。初めは彼らも騒然とした現状に驚いていたが――とは言っても実際は宗則だけだが――彼女らかの説明を聞いてむしろ死者が出ていないことに安堵した。そして一人落ち込んでいるレインを司はむしろ褒める口調で、
「レイン、お前はよくやったよ。友成さんからの話を聞く限り、相手は第三段階に入っていたんだろう？その時点でお前が沼骨を倒していなければお前を含む少なくない人数が命を落としていたはずだ。

お前の対処は間違っていない。むしろ大勢の命を救ったんだ。胸を張れ。俺も相棒として鼻が高い」
「司さん・・・ありがとうございます」
「それにお前が沼骨から得た情報。あれは中々役に立ちそうだ。そうだろ、早紀？」
　早紀は経緯の説明が終わった直後から現場を見て回っていた。現場に到着してから違和感を抱いたようで、その原因を今まで探っていた。
「どうやら最近、この辺り一帯を覆う結界が張られていた形跡を見つけた。一部の無駄のない完璧な術式だ。結界系の魔術の専門家である私でさえ気づかぬほどのものだ。あぁ、わかっている。この結界の効力を知りたいのだろう？慌てるな。この結界の効果はおそらく――――」
　一度言葉を切って、早紀は確信を持って答えた。
「結界を解除した瞬間、結界内で起きた事をそこにいる全ての人物の記憶から消す術式。その名は『夢現（ゆめうつつ）』。幻術にも似たようなものはあるが、大規模でありながら痕跡をほとんど残さない辺り、この術者は相当な実力者だ」
「この術式の特徴は人の記憶を消すことにあるが、機械の目まではごまかすことはできない。『ナーストレンド』内にある監視カメラを調べれば何か手掛かりがわかるかもしれない。諦めるには早い」
「それに私が調べてみようと思ったのは沼骨の言葉を聞いたからだ。もしそれがなかったらわざわざ違和感の正体を調べようとは思わなかったさ。お手柄だよ、黒月」
「司さん、藤壺さん、ありがとうございます」
　目にうっすらと涙を浮かべながらにこりと笑うレイン。司は良く頑張ったと優しく撫でた。
「頼りにしているぞ、レイン。――――ん？」
　撫でる手が止まる。不思議がり寂しがるレイン。司の視線ははるか後方に向いていた。そこにあるのは背の高いビルの群れ。その中

の一点を睨みつけていた。
「どうかしましたか、司さん？」
「いや・・・なんでもない」
そう言いながらも「いつか尻尾を掴んでやる」との呟きに、撫でられて至福の時を味わっていたレインとその様子を見てやれやれと肩を竦めていた早紀が気付くことはなかった。

「まがい物にしては頑張ったほうですが・・・所詮は偽物。あの程度が限界ですね。練達級魔術師には歯が立ちませんか」
とあるビルの屋上。遥か彼方の刑務所で起きた白昼堂々の脱走劇の一部始終をのぞき見していたのは沼骨に『血の記憶（ハイマメモリア）』を渡した人物だ。この演目も開幕直後は胸躍ったが中盤から終盤にかけては胸やけが起きるほどの退屈な展開だった。
「しかしまさか私の結界に気付くとは。さすがは『最智』の魔術師。彼女の目はごまかせませんか」
絶結界術式『夢現』はたとえ『最優』・『最智』と呼ばれる魔術界でも最高峰と呼ばれる魔術師二人であっても気づかれることはないと確信していたが、まさか沼骨（にせもの）が最後に残した言葉によって暴かれるとは。飛んだことをしてくれた。モルモットの最後っ屁と言ったところか。彼にそのつもりがあったかは知らないが。
「それに最後のは危なかった。危うく『最優』に気付かれるところでした。いや、自分が見られていたことに気づいてはいたかな。まったく、油断のならない人だ」
この人物に『千里眼』の力は備わっていない――――そもそも『千里眼』は魔眼に分類される。魔眼とは遺伝や特殊体験により開眼するモノである――――が魔力によって視力や聴力を高めることはできる。魔術に比べてわずかな魔力しか使っていないにも関わらず、『

最優』の魔術師は自身に向けられている魔力を帯びた視線を感知した。それに気付いた瞬間に魔力の使用を断っていなければ確実に居場所を特定され、『魔弾の射手』と共に飛んできたことだろう。そうなっていた場合を考えると背筋に冷や汗が流れる。

「まぁいいでしょう。第二作目は私の負けです。いえ、どちらかと言えばこちらは第三作目ですか。本命である第二作目の物語はまだ続いています。ですがこのままでは埒が明かないですね・・・ではここで一つ、進行薬を投与することにいたしましょう。

さぁ、『最優』の魔術師よ。あなたにこの不幸を止めることができますかな？」

そして事態は加速する。緋瑪夜司の元に陣内宗則から「とある人物に連続炎殺犯から殺人予告が届いた」と連絡が入ったのはこのわずか三日後のことだった。

?―2：過ぎた力、哀れな末路（後書き）

遅くなりましたが更新です。この後の展開が私自身わからないので困惑しています。ホント、どうなることやら（汗

ではまたの時に。

感想ありましたら気軽に＾＾。

誤字脱字ありまいたらご指摘のほうお願いします＞m（__）m＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2571w/

Cardinal Report

2011年11月1日01時16分発行